

一九世紀ヨーロッパにおける人種と不平等

— 身体と歴史 —

ロバート・ムーア

(五十嵐泰正訳)

この小論は、少なくとも中世から今日へと至る連続した物語から、ある断片を切り取って論じたものである。そのため、議論がスナップショットにすぎないような感を免れえないが、われわれに馴染みのある近代的な人種概念が発展してゆく中で、特にその形が整えられていった時期を描くことになる。

ヨーロッパでは反セム主義が、王侯たちが自らの遠征費用と戦士たちの故郷と聖地での行動資金をユダヤ人から召し上げた十字軍の時期から、存在した形跡がある¹⁾。また、エリザベス朝時代のイングランドに、黒い肌の人々に対する偏見が存在し、彼らが王国内で増えていくことが公的に懸念されていた形跡も残っている。

ピーター・フライヤー (Peter Fryer 1984) は、宗教的・大衆的な考え方の中で、すでに二世紀から、黒という色、そして黒い人間が、悪魔と結びつけられてきたと述べている。ある意味でこれは、一般的に「マニ教的」世界観と呼ばれるものから派生したのかもしれない。マニ教は、すべての創造物は善と悪とに分けられると信じていた、初期のグノーシス主義的なキリスト教徒の考え方を参考にしている。より重要なのは、彼らが人を光の子と闇の子に分類できると信じていたことである。グノーシス主義者たちは、自分たちが真理を所有するエリートであり、残りの人々は精神的な闇の中に住んでいるのだ、と信じていた。こうした世界の二分法は、キリスト教信仰に特有なものではなく、ほか

にも例えば、非イスラム的なものすべてに対して最も闘争的な態度をとるムスリムの一部を刺激している、現代のワッハブ主義の中にも見出すことができる。ただ、善と悪（および、善良な人々と邪悪な人々）とのはっきりした二分割という考え方は、おそらくごく初期から西洋思想の中に堆積しているだろうが、マニ教と人種概念のあいだに明白なつながりはありそうにない。善・光と、悪・闇という二分法的思考はその後も長く続き、近代の初期には、魔法をかけようとするときに悪魔が黒人男性に化身して現れると考えられるようになった。悪魔と類人猿、そして黒人男性は明確には区別できないものとされ、その三者ともが、女性、なかんずく白人女性に対して、飽くことのない欲望を共有していると考えられていた。われわれに馴染み深い近代的な用語で人種が論じられる以前から、色の黒い人々が白い人よりも劣っているという考え方が、かなり漠然とした未完成な形で広範に信じられ、実感されていたという事は、どうやら事実のようである。人種が科学的・政治的な問題設定に組み込まれるようになって、それは必ずしも明白な意味を持った言葉ではなく、民族ネーションとしばしば（実際にも、推論上も、あるいは神話的な意味でも）混同されたものだったのである。

（合衆国と同じように）ヨーロッパでは、人種に関する最初期の改まった議論は、広く信じられていた聖書による天地創造説の一言一句の真实性を論じる、という文脈で巻き起こった。聖書の記述は、啓蒙時代とそれに続く時期に台頭してきた科学的なものの方、なかでも進化論、とりわけチャールズ・ダーウインの議論に端を発する諸理論からの挑戦を受けることになった。科学同様、宗教に関する問題でも、こうした議論が粗上にのぼっていた。実体的な利害も、観念論的な関心もともに危機に瀕していたのならば、人種論が、インチキなつくり話であるにもかかわらず、広く人々を惹きつけていた（そして、それが現在にまでいたっている）としても、驚くにはあたらない。自分たちの抱く偏見に合致するように、科学というものを操作しようとする論客たちの実例を挙げることはたやすいものだ。

言葉の歴史は社会科学者にとってさほど大きな関心事ではないが、その言葉が持っている概念の重要性、概念に付せられた意味、そして、概念に重要な意味を担わせる制度といったものには、最大級の関心があるものだ。それでは、ヨーロッパにおける人種をめぐる真剣な議論は、いつ始まったのだろうか？ フライヤーや他の論者たちは、初期の

人種に関する議論の性質を、とても暗示的であり、とってつけたように脈絡がないと指摘してきたが、黒人の劣等性に関する最初の系統的な定式化は、一七七四年に出版されたエドワード・ロングの『ジャマイカの歴史』(Long 1970)に始まっているとも示唆している。ロングは、奴隷貿易がイギリスの人々に厄介ごとをもたらし始めた時期の植民者であり、作家である。このロングの著作を彩っている人種主義は、フライヤーの言を借りれば、「奴隷制の小間使いたち」(Feyer 1984: 166)と言うべきものであった。ロングは黒人たちを、神からアメーバへと続く存在の大いなる連鎖の中で、白人に劣り、高等霊長類に近いものとみなしていた。黒人は、白い人間よりも、サルやオランウータンに近い存在とされたのだ。また、ロングは、フライヤーが言及している初期の小冊子の中で、(下層階級の)白人女性には黒人男性を好む性向があり、黒人男性も同様に、白人女性に情欲を駆り立てるとも述べている。黒人は怠惰でかつ好色である、と。バントン(Banton 1985: 11)が、ロングはあまり影響力のあった人物ではなく、彼の著作は主に奴隷制廃止論者に引用されると示唆している一方で、ポリアコフ(Poliakov 1974: 178)はこの見解に異議を唱え、ロングは広く読まれていたと主張している。ロングがどの程度読まれていたにせよ、ロング自身は、一八〇七年に終了した奴隷貿易や、一八三三年に廃止された奴隷制に対しての、強力な擁護者にはならなかったようである。

『人種の意味』という著作の中で、人種概念が啓蒙時代の後に流布し始めたこと論じたのは、キーン・マリリックである。この時代に封建制が一掃され、平等への社会的参与が確立されはしたが、その一方で、人々のあいだに、国家の中に、そして国家間に新しい不平等が出現した。現実に見えている差異が永続的なものであるならば、それをどのように説明したらよいのだろうか？ もしロックが一七世紀末に主張したように、権利と平等が自然状態(Nature)に根ざしているものとすれば、不平等の理由もおそらく自然状態の中に見出されるはずだ。マリリックはさらに議論を深め、人種や不平等は、普遍的な人間性といった観念を抱くことのできる世界でのみ意味を持つものであり、それゆえ、不平等の問題をめぐる議論は、啓蒙時代以前には起こりえなかつたのだと論じている。マリリックは、人種に関するそれ以前のさまざまな考え方を、単に偏見と迷信に満ちたものであり、異なるものに対する非合理的な反応だとして、カッコに括って保留してしまっている。しかし、人種概念の中身が何であるにせよ、人種に関する論争が

最初に起こった時期をいつと特定するにせよ、啓蒙時代以前の考え方（例えば、ジョン・ロックのような）は、その後
に続く議論の基盤の一部を準備していることに、われわれは留意しなければならない。しかも、その当時は——おそ
らくはデユルケームの時代にいたるまで——、人種に関する人類学的なフィールドワークに基づくデータなど存在し
なかつたのだ。当時の外国の文化や人々についての報告はもっぱら、旅行者や宣教師、そして植民地行政官からもた
らされたものだった。

啓蒙主義は、人間とその他の動物界とを分かち、理性に特徴づけられる、普遍的な人間本性という考え方を広めて
いった。その考え方からすると、人間同士との差異は人為的なものであるか、さもなければ見当違いなものという
ことになる。例えばルソーは、人間の差異について注釈するときに、肌の色の問題だけをことさらに抜き出すことは
なかつたし、何らかの社会的な価値を身体的な差異に帰することも決してなかつた（Malin 1996: 50）。そのうエル
ソーは、同時代の他の書き手たちと同じように、人間の差異は可塑的で変化しやすく、大抵は周囲の環境の違いに由
来するものだと論じていた。ルソーにとっては、適切な環境があれば、すべての人類は進歩していくことができるも
のなのだ。したがって啓蒙時代の思想家たちは、文化の差異を、人間のある共通の特徴が異なった形で表出したもの
として論じることができた。

奴隷制に関する議論は、人種に関する考察ではなく、財産権の問題に駆り立てられて巻き起こったとマリーツクは
示唆している。ロリマーの示唆によれば、イギリス上陸の後はその以前の身分にかかわらず何人たりとも奴隷たるこ
とはできない、との判決を一七七二年に下したマンスフィールド卿にも、資産家たちの権利に関する懸念が向けられ
ていた。例えば年季契約労働がイギリスにおいてもいまだ普通のことだったようなこの時期には、人に対する所有権
を撤廃することの意味合いは広範な影響力を持っていたのだ（Moore 1974）。奴隷がイングランドに上陸したら自由
になれるのであれば、なぜ鉱山労働者は、自らを年間三六四日間の自由のない労働へと縛りつける「契約」から逃れる
ことができないのか？ そのうえ、ある論者たちによれば、農業労働者や鉱山労働者の雇用品評会は、ほとんど奴隷
オークションに等しいものだったのだ（Corner 1978: 103）。一方フランスの議会は、植民地との貿易に大きく依存し

ている国家（と資産家階級）の財産権を妨げるとの理由で、一七九〇年の奴隸制廃止に反対している。フランス領内からの奴隸制廃止は、資産家階級に敵意をもち一七九一年のハイチの奴隸反乱にも呼応した、一七九四年のより急進的な議会まで待たねばならなかった。独立宣言の理念に従いながらも奴隸を保持し続けた合衆国と同じように、フランスも人権宣言を完遂することはなかったのである。英仏どちらのケースにおいても、啓蒙主義の信念が実際問題として、世俗的な利害によって一部変えられてしまっていたのである。

人間の間の差異は永続的なもののように見えたために、それは次第に生得的なものだと思われるようになっていった。マリーツクによれば、ここがより体系的な人種間の差異の議論へと道を開いたポイントである。ただ注意しなければならぬのは、ここでは人種間の差異だけが単独で論じられていたわけではないということだ。今日であれば社会階級やジェンダーに起因すると考えられるであろう差異が、一九世紀初期には生得的なものとして説明可能であり、人種の議論へと組み込まれていたのだ。自然の再発見は、啓蒙主義や都市化、そして初期の産業化がもたらした変化に対するロマン主義的な反発の一環でもあった。より具体的に言えば、一七八九年のフランス、一八四八年の全ヨーロッパ、一八七一年のバリ・コムイーン、そして後の組織化された労働者の台頭といった一連の政治的激変は、すべて社会の分裂を暗示するものであり、封建制秩序のみならず体制秩序そのものの崩壊の傾向を示していた。そうした中で、コムユニティと帰属意識、伝統を再構築する必要性が痛感されており、理性の時代において、神聖なるものの再発見と復活が求められていたのである。エドモンド・パークは、非理性的で神聖なものが体制の維持のためには必要であると主張し、大衆にとっては中途半端な理性よりも「健全な偏見」のほうがいいとまじである、と示唆しているが、それは、二〇紀末のイギリスにおける『ソールズベリー・レビュー』⁽²⁾とも響きあう所感である。

また、一八世紀から一九世紀への世紀転換期のヨーロッパでは、近代的形態のナショナリズムのはっきりとした勃興も見受けられた。神話や伝説を称揚することは、英雄的な祖先を捜し求めることと同様に、近代ナショナリズムの重要な一側面であった。体制の基盤であるのみならず、国民の根本的な礎ともなっている歴史的なアイデンティティを絶え間なく参照することによって、体制とコムユニティの衰退を克服できるかもしれないと考えられたからだ。

同時に、そうした歴史の探求は、端的に言つて、ある人たちがある特定の国民に属して、い、ない、ことを暗示することにもなつた。社会の変化に対するこうしたロマン主義的でナシヨナリスティックな反発は、秩序と進歩の折り合いをつけることを可能にするような、社会を機能させる客観法則を見つけようとする実証主義者の探求と、対照をなしていたのかもしれない。実証主義者たちにとって社会とは、(他のすべてのもの同様)自然の法則にのっとっているものであつた。この後者の見方の一つの帰結が、人類が社会的というよりは生物学的な言葉で捉えられるようになったことである。このようにして、生物学を通して、共通の人間性という概念の否定と、歴史を通して、何らかの特定の国民共同体への仲間入りの否定、その双方の基礎となる下地が準備されたのである。

人種概念

「存在の大きいなる連鎖」という考え方は、一八世紀の科学界で影響力を持つていた。この理論に従えば、生あるものたちは、はつきりとした特異性の差ではなく、段階的な程度の差として相互に異なっているということになる。生物は、周囲の環境への対応として、あるいは、繁殖を通して突然に、その姿を変異させていくことができる。新しい形態は、それ自身も変容してしまうまで、その特徴を続く世代へと伝えていく。ラマルク主義として知られているこの獲得形質の遺伝という考え方が、ハーバート・スペンサーの進化論の立場であり、二〇世紀になるとそれは、スターリン時代のソ連における正統な生物学の一部ともなつた。もしすべての生物を、低位なものからより高位なものへと進むものものさしの上に、他の生物との関係性の中で位置づけることができるのなら、黒人がサルや類人猿と密接に関係があり、ことによると人と猿の雑種なのだと信じることも可能になつてくる。こうして、今日にいたるまで近代科学の文脈で続けられている、人類と他の霊長類を繋ぐ「ミッシング・リンク失われた環」の探求が始められることになつた。

人種の多様性と聖書の記述との折り合いをつけるという、一八世紀から一九世紀初頭にかけての科学者たちにとつての最大の問題に対処する一助となつたのが、ラマルク主義である。聖書注釈者によれば、地球は誕生から四〇〇〇

年から五〇〇〇年ということになっている。われわれがみなアダムの子孫だというのなら、進化して人種の差異が
できあがるのに十分な時間があつただろうか？ もし人間の体格や文化が十分に適応力に富むものだというのなら、
答えはイエスである。それゆえ、「最後の科学的単一起源論者」プリチャードは、文化や環境の変化は、数世代のう
ちに肉体的な変化をもたらすことができる、と述べていた (Barton 1967: 26-27)。つまり、肉体的な特徴は文化的な
特徴よりも流動的だ、と考えられていたのだ。プリチャードの結論は、こうである。「すべての人種は、一つの種で
あり、家族だ」 (Barton 1967: 28)。

また、人間の多様性を説明する他の要因も提示されたが、その中には、気候の違いや神の干渉といったものも含ま
れていた。後者のなかで名高いのが、ノアの末子のハムを奴隷の運命へと追いやつた「ハムの呪い」と呼ばれるもの
である⁽³⁾。

奴隷の奴隷となり、兄たちに仕えよ。(創世記、九章)⁽⁴⁾

一方、地質学や考古学上の証拠となる発見が次第に地球の本当の年齢を明らかにし、発掘された遺物は古代におけ
る人間の身体類型の多様性を示唆していた。異なる場所には異なる人種を配置する、というのが神の摂理であるよう
にみえる。ここにおいて、人間の起源は複数存在し、人種によって文化が決定されていったということを、主張する
ことができるようになった。人種こそが歴史の原動力(あるいは、ただひとつの原動力)と考えられるようになったの
である。白いコーカサス人種は文明の最上層に到達しているのだと主張される一方、ニグロ人種はいまだ原始的な野
蛮の状態にとどまっているとされた。人間の文化的な差異は永続的なものであり、それは基層に横たわっている本
来の差異の表出だという合意が、一八〇〇年代中葉に合衆国、イギリスそしてフランスの書き手たちのあいだで、形
成されていった。さらには、人間のさまざまな類型は本質的に相対立するものだ、とも論じられていった (Barton
1967: 32)。また、ノックスや彼の弟子のハントといった面々は、ニグロ人種にとっての最善の状態はヨーロッパ人に

従属することであり、ヨーロッパ人のみがニグロ人種を文明化できるとも論じていた。

ノックスは、それぞれの人種は自然の意思に従ってしかるべき土地に住まうべきであり、それゆえ、ケルト人はイングランドから追い出されるべきなのだという信念を持っていた。一九世紀を通して、例えばアイルランド人問題が論じられるときなどに、このノックスのような考え方は一般的なものであった。一九世紀の初頭と終盤における、ケルト人とその他の人々、およびスコットランドのハイランダーとローランダーの人種の比較の例に、筆者は言及したことがある (Moore 1972: 35-36)。そこには、劣等人種がヨーロッパ人に打ち負かされるのは不可避であるとしたり、ケルト人やハイランダーの絶滅を積極的に主張したりするような、より過激な考え方も存在していた。しかもノックスは、ニグロ人種の絶滅を実現させる方法などといった問題ではない、と断言していたのである。こうしたノックスと彼の弟子たちによって推進された人種概念は、一九世紀中葉の医学教育と結びつくことによって、広く世間に流行するようになっていった。

ただ、ノックスの側に立つ批評家たちがいかに影響力があつたとはいっても、以下に見られるように、彼らの人種観への合意が完全には固まっていなかつた節がある。

「……」生得的で不変の人種的特質の存在とやはら、懐疑的に考えられるべきであり、そうした原理の上に成り立っている理論は、単に奴隷制やその他の人種の抑圧への理由づけに過ぎない。

(Toqueville 1853, Stone 1977: 63 より引用)

人種的な特質とは人間の身体の特徴であるが、ノックスや彼と同時代の科学者たちの理論は、どういった具体的な解剖学および科学的証拠に裏づけられていたのであるうか。皮膚の色が人種分類の第一義的な指標だというのなら、序列化の根拠としては不十分だ。人類をいかに序列化するかという問題への答えを見つけたのが、頭蓋骨に関する研究、すなわち頭蓋測定術だった。

頭蓋計測で重要だったのは、「顔面角」と「頭示数」の二つである。劣等な類型は、顎が突き出て短頭であり、つまり、よりサルに似ている。当時は、高等な精神的機能は脳の前頭葉で、その他の機能は脳の後ろの方でなされると信じられていた。そのため、高い額はより高い知的能力があることを意味していたのだ。ステイーブン・ジェイ・グールドの言葉を借りれば、「前頭部が最良だ (Front is Best)」。理想的な頭の形とされたものは、古典的なギリシャ彫刻のそれだった。

知性と脳の大きさが直接に相関していると考えられていたために、頭蓋計測のなかでも最も重要な要素だったのが、脳の大きさである。反証が示すものから自説を守るため、頭蓋計測の研究者たちは少なからぬ工夫をする必要に迫られてはいたが、彼らの仮説への反論は失敗に終わった。脳の大きさと人種とを結びつける議論の中心的な提唱者は、アメリカ人のサミュエル・ジョージ・モートンである。自らの膨大な頭蓋骨のコレクションを計測したモートンは、「近代コーカサス人種 (Modern Caucasians)」を頂点に、「モンゴル人種 (Mongolians)」を中盤に、そして「ニグロ人種群 (Negro Group)」を底辺に置く人種の序列づけを行ったのである。

こうした研究の起源は、ヨハン・フリードリヒ・ブルーメンバッハが一七九〇年から一八二八年にかけての『諸人類頭蓋集成 (Collectio Craniorum Diversarum Gentium)』の出版へとつながる頭蓋骨のコレクションの調査に着手した、一八世紀のドイツに遡る。ブルーメンバッハは、コーカシア、モンゴリア、エチオピア、アメリカナ、マレーという五つのカテゴリーからなる人類の分類法を考案したが、そのうちの二つは、現在でもその用語が生き残っている (コーカソイドとモンゴロイド)。彼の『人類の自然的変異について』(Blumenbach 1795) という著作は、一八六五年に英語に翻訳されている。ただしブルーメンバッハは、人間のカテゴリーは独立的なものではなく、「人類の無数の変異が、感知できないほどに互いに溶け込んでいるものである」という信念を持っていた。

フランスには、ヨーロッパにおける頭蓋計測の指導的な提唱者であるポール・プロカがいた。プロカもモートンの仮説に賛同していたが、彼は批判者に対してもっと効果的に反論している。プロカの方法論に関してグールドは、脳の大きな犯罪者や脳の小さい名士 (man of eminence) の存在といった厄介な問題を、プロカがどのように処理してい

たかを描き出している (Gould 1984: 94-95, 91-92)。女性の脳は男性より小さいという問題をめぐって、プロカは二重の回答を用意していた。すなわち、女性は男性に比べて肉体的に小さい、え、知性も劣るので、女性のほうが脳が小さいと推測するに十分な理由がある、と (Gould 1984: 104)。ドイツ人研究者の中ではフォークトが、一八六三年に出版した『人間についての講義 (Lectures on Man)』において、頭蓋容量からニグロ人種が劣等であることを証明できると論じていた。彼は自身の調査の一環として、一五〇〇万人のドイツ語圏の子どもたちに、頭蓋計測を受けさせたのである (Polakov 1974: 265)。

人種ヒエラルキーに関するこうした分析の科学的根拠は、今日のわれわれにはほとんどピンと来ないものであるし、脳の重さを量るために、死んだ犯罪者、しかも死んだ同僚の体を切り刻む措置など、怪奇なものにしか見えない。しかし、後に優生学者によって適切な統計学的相関検定が考案されるまでは、脳の大きさと同能の相関の真偽を検証することはできなかったのだ。こうした人種「科学」における頭蓋計測の段階は、以下のようなことを例証している。第一に、差異の定量化が、どのように試みられたのかということである。数字が、科学者たちのあいだで議論の対象となったわけである。第二に、当時の議論は、単独で定量化可能かつ汎用的である新たな概念——知能指数——を、人種の序列づけに使うことを議論した二〇世紀の論争を先取りするものであった。第三に、ある人種内部での著しい差異も無視できないということである。人種内部の差異の存在から導き出された結論は、こうである。人種グループ内の差異は、人種間の差異より大きいわけでもそれと重なり合っているわけでもないが、白人社会の中にも退化した面々がいいて、彼らはどうやら人間の発達の前段階を代表しているようだ、と。イタリアでは、ブルーメンバッハの同時期の研究者であるヨハン・カスパー・ラファターの仕事を引き継いだチェザレ・ロンブローゾが、ヨーロッパ社会の中の犯罪者を類型化しようと、人相学の技術を用いていた。彼が人の犯罪性を示す兆候としたものの中には、大きな額、低い額、そして長い腕(と刺青)といったものが含まれていた。さらにロンブローゾは、犯罪者の肌は黒ずんでいるとも示唆していた。こうした「生まれながらの犯罪者」は、劣等で野蛮な形態の男女——つまり、以前の進化段階への先祖がえり——なのだから、犯罪者としての自らの宿命から逃れることはできないと考えられた。⁹ 犯罪者